
ばかでも、浅はかでも。

七色ちきん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ばかりでも、浅はかでも。

【Nコード】

N7485K

【作者名】

七色ちきん

【あらすじ】

男女カップルの日常会話をだらだらと。

わたしは、彼と喫茶店でお茶を飲んでいた。

季節は初夏で、冷房をいれるにはまだ少し早いけど、風がないと長袖では暑い、おまけに湿度もわりとある、けだるい日だった。

蒸し暑い気候に負けず劣らず暑苦しい彼が熱弁をふるっていた。わたしは気だるく、おざなりに彼の言うことを聞いていた。

「俺はさ、結婚するなら一目ぼれの相手がいいな。」

彼は弁論がすきだ。

大学時代にも彼は好んでディベートの講義をとっていた。

だが、4年間熱心に弁論術を学んでいたにも関わらず、未だに彼の論述は、世論とか表面的な知識を並べ立てているだけのものであるとわたしは思う。

要は彼は優秀ではなかった。

ただ、その熱心さは賞賛に値する。

と、思わないでもない。

「よく言うだろ。」

一目ぼれ同士が結婚して、生まれた子供が優秀になるって。

人間の直感が、自分にとってのベストな遺伝子をもとめてるんだ。」

「ばかじゃないの。迷信だよ。」

それこそよくいうじゃない、『優秀なオリンピックピック選手は、世界中の人間から求婚されることになってしまっ』って。」

それこそ有名な反論があるじゃないか、そういつて彼はつづけた。

「『あまりにも自分にとって分不相応な遺伝子には、遺伝子が萎縮する。したがって一目ぼれは起こらない』って。よくいうだろ。」

うるさいなあ、ほんと。

「人間っていうのはさ、恋愛する相手を直感でえらぶんだ。一目ぼれっていうのはさ、人間に残された最後の動物としての本能だよ。」

この能力は絶対に失ってはならないと俺は思っただよね。」

だからさ、結婚相手を条件で選ぶなんてナンセンスだ、と彼は熱心だ。

「お言葉ですが。」

条件で選ぶ人なんて極少数だよ。

一緒にいてしあわせだなー、とか。

一緒にいてたのしいなー、とかさ。」

「それこそ条件じゃないか。」

結婚ていう契約で、自分にとって快適な日常生活を保証してんだよ。だから婚姻届だすんだよ。これも一種の契約で、誓約だからだ。」

「なにいつてるの。」

「そりゃさ、皆金持ちとか権力者とかと結婚できりそれが一番いいとおもうよ。」

でもさ、特権階級っていうのは社会の1割未満の層のことなんだよ。

だから特権なんだ。」

「だからなに。」

「普通の人間の場合、特権階級と結婚できる可能性は低い。
だから金でも権力でもない愛情ってステータスを新しく結婚条件に
位置づけたんだよ。」

「そんなことないわよ。」

「快適な日常生活を「幸せ」なんて言葉に置き換えたのも人類の自
己欺瞞だよな。」

「きみはほんとによくそんなくだらないことを、つらつらと並べ立
てられるよね。」

「どこがくだらないんだよ。」

「世論とか表面的な知識を並べ立ててるだけだよ。
さも自分がかんがえついたあー、みたいな顔してさ。」

「ひどいこというね。」

「だってきみ、これからどこにいく予定なんだっけ。」

「きみんち。」

「そうだよな。」

大学で知り合ってたのだらだと交友関係を続けて、3年目で付き合い
だして、5年目で結婚を決めて、これから結婚宣言しにいくんだよ

ね。

プロポーズは、君といると毎日たのしいんだ、だったよね。
一目ぼれのレールなんか全くのれてないじゃない。」

「そうなんだよ。」

だから最後になってびびってんだろ。

これでいいのになって。

だからさ、言ってくれよ。これでオッケーだって。
俺を後押ししてくれよ。」

「情けない男。」

加えて失礼な大馬鹿男。

「じゃあなんでその情けない男と結婚しようと思ったんだよ、きみは。」

それはね。

「一目ぼれよ。大学1年に合コンであつたときにね。」

「え、そうなの。」

「わたしは、きみの優秀な子供を生んであげる。」

おどろいたな。

そういつて彼は、俺たちの結婚は成功じゃあないか、さあいこう！
といった。

わたしはいつだって彼にとって最高の言葉を投げかけることができ

る。

そのたびに浅はかなー、と思わなくてもないけれど、
そこがまた愛しいなー、とやっぱり思わなくてもない。

誰がなんと言おうと結婚は成り行きと勢いだ。

わたしはそう思う。

彼にはいわないけれど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7485k/>

ばかでも、浅はかでも。

2010年10月21日21時11分発行